哲學研究　第三十三號

心理學と客觀的方法（承前）

楢崎淺太郎

プラトーは Timäos に於て、造物者が全世界を造り生命を限なく透徹せしめたる後、恒久の像の形成に就き沈思し遂に時間を造り、之と同時に其の部分たる日時、歳月も造られた(Als der Schöpfer das Weltganze gebildet und mit Leben durchdrungen hatte, sann er darauf, ein Bild der Unvergänglichkeit zu gestalten. Dieses Bild wurde die Zeit, mit der zugleich Tage, Monate und Jahre als ihre Teile geschaffen wurden)と述べて居るが、この時間の意味は色々に解釋が出來るであらうが、兎も角興味ある表現である。

常識では日時、歳月は時間の一部であり、時間は天體の恒久の運動に於て思考せられ、吾人の外に在るのであらうが、其の眞想に於ては、却つて時間は吾人の心の内にあつて、外界の運動は時間測定の手段に過ぎない。今假に吾人が規則正しき運動の系列より成るこの世界を離れたとするも、吾人の意識に觀念の起去來往し、緊張弛緩の感情或は感覺の消滅せざる限り、時間の觀念は猶明に吾人の意識に存するのである。

而して此の時間は觀念感情の進行と其の經過を共にし、時には光陰矢の如く、時には一日千秋の思ひもある。この光陰矢の如き感じ、一日千秋の思ひは時間の客觀的標準に依つて測つたのではなく、寧ろ內的標準に依つて客觀的時間を測つて居るのである。我々はこの客觀的時間を有せざる以前に已に主觀的時間を有し、客觀的時間測定の機械を發明せざる以前に已に時間測定の自然の尺度(natürliche Mass der Zeit)を有して居るのである。若しこの自然の尺度がなかつたならば、ヴントの云ふ如く時間測定の理念すら生ぜなかつたであらう、(Die Idee einer Zeitmessung würde daher niemals entstehen können)(「一」一五七頁)と、思はれる。

この吾人の內にある主觀的時間其の者は心理學的には一種の心的現象であり、又其の時間の測定の自然の尺度も又一種の心的現象である。然らば、この主觀的時間及び其の自然の尺度は、心理學的には如何なる種類の精神現象であるか。之を形成する要素は何であるか。その要素が如何なる結合作用に基き、如何に結合せられて主觀的時間を構成するか。他の精神現象と如何なる點で異つて居るであらうか。主觀的時間測定の自然の尺度は恒常であるか、變化するか。其の恒常を保ち變化を起すは何に基くか。余は此等の問題が個人心理學の時間に關する中心問題であり、

實驗心理學者が眞に精神現象が客觀的方法で研究出來ると思ふならば、此等を研究するに從來の單なる觀察又は思索を棄てゝ、眞の實驗的研究方法を適用すべきではあるまいかと思ふのである。然るに初期の實驗心理學者の所謂精神の時間的研究と云へば、精神の客觀的時間を其の客觀的標準によつて測定したことは、前號に詳はしく述べた通りである。然らば精神の客觀的時間の測定は如何なる動機によつて始められたであらうか。

ヴントの云ふ如く、人が社會的生活を爲すに當りて極めて重要なる要素は、時間尺度の同一 (Gleichheit des Zeitmasses) である。然るに吾人の本來有する自然の尺度は、內外の條件に從ひ絕えず變化するから、客觀的標準と爲すことが出來ない。そこで人は遂に外界の均一なる運動の概念に指導せられて時計を發明した。一度時計が發明せられると、人は之を使用してあらゆる現象の客觀的時間の測定を企てる。之れが自然科學に於ける時間的研究の濫觴である。それならば實驗心理學も自然科學者と同一の意味に於て精神の客觀的時間を測定したのであらうか。或は又他の目的を達する手段として之を試みたのであらうか。

卽ち一七九五年に英國グリーンウッチの天文學者マスクライン(Maskelyne)が、彼の助手であつたドクトル、キンネブロック(Dr. Kinnebrook)を突然解雇しなければならなくなつた一つの悲しむべき事實が起つた。このキンネブロックは從來極めて鋭き天體現象の觀察者であつたが、一七九五年の秋頃に至りて氏はマスクラインよりも約〇、五秒だけ觀察が遲れ出した。そして其の翌年には兩者の差が〇、八秒に增加した。これが實に其の解雇の原因であり、又之が精神の時間的測定の起因となつた。

この時の假定的な星の運行の時間を測定する方法は通常のものと變らなかつた。卽ち觀察者は望遠鏡によりて星の運行を觀察して居ると、振子の音が聞える。次ぎに星が漸次望遠鏡の視野內に在る糸に接近して來る。かくして星が未だ糸を經過しない前の最後の振子の音を聞いた瞬間に、觀察者は、其の星が糸からどの位隔つて居たかを觀察するのである。次ぎに又其の糸を星が經過して初めて最初の振子の音を聞いた時の星の位置は、糸からどれだけ(前とは反對の方向に於て)離れて居るかを目測するのである。かくして糸の前後の星の位置から、星の運行の速度が十分の一秒の單位で測定が出來る。

マスクラインは、かくの如き方法で天體現象を觀察する場合に於て、氏の助手は氏よりも觀察が遲いから、最早其の任に堪えないものとして遂に解雇した。(Maskelyne, Annalen der Greenwicher Sternwarte, 1795. 間接引用)そしてこの事件が個人方程式の發見(Entdeckung der Persönlichen Gleichung)を促したのである。

茲に於て著名なる天文學者ベッセル(Bessel)は、グリーンウッチ天文臺のこの報告によつて興味を起し、この目測の時間の差異を詳細に研究し遂に個人方程式を發見するに至つた。ベッセルの研究方法は其の主要なる點に於て上に記した方法と同一であつた。そして其

の結果驚く可き事實を發見した。卽ちベッセルは氏の同僚よりも早く觀察するを常とし、其の最も顯著なる場合にありては、他の被驗者アルゲランデル(Argelander)よりも約一、二二秒速く觀察した。又彼はこの差異が年齡に應じ如何に變化するかを研究し、其の結果より個人方程式を次ぎの如くに算出した。

1914年　Struve—Bessel　=0.04
1821年　〃　〃　=0.80
1828年　〃　〃　=1.02
1834年　〃　〃　=0.77　(「二」六〇三頁)

この數の意味を實例によつて說明して見ると、例へば一八三四年にシュトルーヴがある星の子午線經過を午前八時に認たとすれば、ベッセルは其の星を午前八時よりも約〇、七七秒だけ早く認めるのである。勿論この數は多數の測定の平均である。そして天文學の報告に於て個人的錯誤(Persönliche Fehler)が方程式によりて示さんがために、個人方程式(Persönliche Gleichung)なる名稱が初めて作られた。(Bessel, Königsberger Beobachtungen Abth, VIII. 1822. und XX. 間接引用)ベッセルが個人的錯誤を確定した以來、多數の天文學者は同種の測定を實行し、自己の天文學上の觀察を他に應用するに當り先づ、それを個人方程式によりて訂正する樣になつて來た。かくして天文學上の觀察が一層確實となつて來た。

ところが、一八四二年に至りては、アラゴウ(Arago)が時計仕掛にて時間點を描き、この人的誤差を全然除去せんと試みたが、二十分の一秒以下に減少せしむることは出來なかつた。一八五一年に至りてボールド(Bord)は電氣仕掛の記述法によりて、個人差を百分の一秒まで縮少せしめ得た。

此等の天文學者は人的誤差の測定に熱中したが、其の動機は人的誤差の眞の原因の討究にあらずして客觀的條件の改良に依り其の誤差を除去せんと欲した點にある。けれども如何に工夫して客觀的條件を改良するも、其の全部を除去することには、遂に成功しなかつた。そこで誤差の原因を主觀的方面に求め、主觀的條件の改良によつて、之を除去せんとの企圖が生じて來た。一八五八年に至りプラズモウスキー及びハルトマン(Prazmowski und Hartmann)は觀察の練習によりて、この誤差を消滅せしめんと試みるに至つた。

ヒルシュ(Hirsh)もハルトマンと同樣の目的を以て、觀察の練習に全力を注ぎ其誤差の消滅に努めたが遂に不成功に終つた。氏の結果によると人的誤差は全然除去し難きのみならず、又之を恒常に保つれこどすらむづかしい。常に〇、〇一三秒乃至〇、三六二秒の大なる動搖あることを發見した。プラズモウスキー、ハルトマン、ヒルシュ等の研究は、其の本來の目的たる天文學上の要求を充すことは出來なかつたが、然し人的誤差の問題の內部的條件に留意し精神的方面よりこの誤差を除去せんと試みたのは、本問題をして、從來の客觀的なるものより、心理學的なるものへの過渡段階を作つたものである。

ヴントは此等の天文學者の發見した個人差の問題に心理學的興味を感じ、此等の天文學者の使用したる方法を改良して研究を行ひ、之に依つて心理學の實驗的研究法を創設せんと努力した。この努力は一八六二年の一大論文(「三」)に見ることが出來る。

ヴントは個人差の事實(Thatsache der persönlichen Differenz)は觀念及び思考作用の經過と結合せるある一定の時間的尺度(ein bestimmtes zeitliches Mass)と密接なる關係の存することを認め、最も單一なる形式の下に於てこの時間的尺度を實驗によつて精密に測定した。即ち氏は二の異なる觀念(聽覺觀念、視覺觀念)を接近して生起せしめ、其の觀念の經過の速度を測定して平均八分の一秒なる價を得た。ヴントはこの時間は聽覺觀念と視覺觀念との間を經過する時間である(Zeit zwischen Gehörs- und Gesichtsvorstellung Vergeht)と爲し、かつこれは常にコンスタントであると云つて居る。この八分の一秒は觀察者が二つの異る觀念の生起を觀察する時時としては先に場所を見次ぎに音を聽き、又時には先に音を聞き次ぎに場所を見る際の時間の差である。かくしてヴントは觀念の進行の速度を測定する事に成功したのである(「三」XXVIII頁)。從來多くの天文學者は個人差の研究に沒頭したけれども、觀念進行の速度を測定せん

とする心理學的興味には達せなかつた。ヴントは天文學的なるものを遂に心理學的方向に轉向せしめた。

けれども、ヴントの測定した時間は主觀的時間ではなくして、意識とは直接の關係を有せない客觀的時間である。換言せば、內觀によらずして客觀的に測定し得らるるものである。この客觀的時間が明になつても、或はならなくとも意識的事實の闡明とは直接の關係の無いものではあるまいか。余は之を疑ふものである。若し之によりて意識的事實に關する何等かの知識を得又は何等かの發見を爲し得ないならば、余の所謂個人心理學から見れば、大なる價値あるものとは云はれないではあるまいか。然しながらヴントは觀念作用の速度に關するこの研究を、純心理學的と名け得らるゝであらうと思ふと云つて居る(Ich glaube diese Untersuchung über die Geschwindigkeit des Vorstellens eine rein psychologische nennen zu dürfen)(「三」XXVIII頁)が、これは如何なる理由で純心理學的と云ひ得るのであらうか。

ヴントは之に答へて『假令ひこの研究の際に感官の興奮を使用はするけれども、こは決してこの研究の本質的なものではない、單に實驗の補助手段に用ゆるに過ぎない。而してこの外的興奮とは全然無關係な觀念作用及び思考作用が同一の法則に

準ひ同一の時間的尺度に隨つて起つて居るといふことは毫も疑ふことが出來ない、(obgleich Sinneserregungen sind hier keineswegs das Wesentliche, sie sind nur als experimentelle Hülfsmittel benützt, und es ist nicht zu bezweifeln, dass das von den äussern Erregungen vollständig unabhängige Vorstellen und Denken nach denselben Gesetzen und in demselben zeitlichen Masse erfolgt.)(Ⅲ, XXVIII頁)と云つて居る。即ちヴントの初期の見解によれば、實驗の際に用ゆる刺戟及びこの刺戟から喚起せられた感官興奮は心理學の對象でもなく、又之を喚起し之を觀察するのが心理學的研究の das Wesentliche なものでもない。此等の刺戟、此等の興奮は單に experimentelle Hülfsmittel に過ぎない。故に外部の刺戟又は感官興奮を補助手段に用ひたからと云つて、之れが心理學的研究に成り得ないと云ふ理由は毫末もないと、消極的方面からかゝる研究が心理學的研究と成り得る可能性を主張して居る。

ヴントのこの主張は初期より後年に至るまで少しの變更も見ない。常にかくの如く論じて、心理學の研究對象は刺戟や感官の興奮にあらざることを極力論定して、精神物理學的唯物論の心理學に反抗しながら、前に述べたる如き研究の心理學的なることを明にせんと努力して居る。けれどもこれだけでは、未だ積極的に純心理學的とは云へない。それでヴントはこの研究の結果たる八分の一秒の恒常の價を以て、

外的興奮とは全然獨立な觀念又は思考の作用が、自ら働く時に必ず之に隨はねばならぬ Gesetze を示すものと解釋し、此の點に於て心理學的意義を認め、以て、この研究を reine Psychologische と考へて居る。ヴントの思考する如く、精神の客觀的時間を客觀的に測定した結果が常にコスタントであるから、精神はこの時間的尺度なる一種の法則に準つて生起消長するものであると云ひ得るならば、前號に掲げた各種の精神過程に要する時間の確定からも、之と同種の法則を豫定することが出來るであらう。從つて總べて此等一切の精神の時間的測定から、かゝる意義の法則を發見し得らるゝであらうから、此等の研究は何れも rein psychologische Untersuchung と云ひ得るであらう。

けれども問題は此の點に潜んで居る樣に思はれる。八分の一秒なる時間は內觀に現れたものではない、純客觀的な價である。此の價が如何にして內觀的事實たる Vorstellen und Denken と關係して心理學的法則となり得るのであらうか。吾々はかゝる客觀的結果の暗示に基き、更に內觀を精密にする時は、聽、視兩觀念の間に主觀的時間を觀察することが出來、又ある場合にはこの主觀的時間の比較的の量的評價も爲し得るのであらうが、而しこの主觀的時間並に其の量的評價と、先に測定せられたる

八分の一秒とは質的に全然異つたものである。ヴントはこの八分の一秒を以て、或はこの主觀的時間の精密なる評價と考へて居つたのかも知れない。氏は一八八五年に出版した Essy's 中の論文に於て、時間の主觀的評價は精確でないから、時計が發明せらるゝと心理學者に精神作用の時間的測定なる neue Aufgabe が與へらるゝと云つて居るから、上の如くにも推測せられるのである。

けれどもこの推測も當らぬ樣である。已にヴントも承認する如く、主觀的時間を客觀的に測定することは、das veränderliche Massstab を das unveränderliche Massstab に關係せしむるのであるから（「一」一五七頁）測定した價は已に主觀的性質を失つて居る。從つて內觀的事實と直接の關係を保ち得ない。後年に於てヴントは心的法則の物的法則と異る點は anschaulich にありとして居るが、聽、視兩觀念の進行の速度たる八分の一秒は、決して anschaulich な事柄ではない。ヴントが初期に考へて居つたこの心的法則は、自然科學の法則に近き unanschaulich なものである。ヴントがこの時にこの場合に考へて居た精神は、現實活動の原理の上から見た精神とは稍離れ、寧ろ實體的概念の上から考へた精神に近い樣である。かく推定し得らるゝ理由は次の點からである。

ヴントは心理學に實驗的研究の適用せられ得る理由を、精神を自然現象と見られ得る點に求めて居る (Sobald man einmal die Seele als ein Naturphänomen und die Seelenlehre als ein Naturwissenschaft auffasst, muss auch die experimentelle Methode auf diese Wissenschaft ihre voll Anwendung finden können)([三]XXVIII頁)。余はヴントの此見解の如くに、精神を一種の自然現象と解し、心理學を一種の Naturwissenschaft と思考するならば、かゝる意義の心理學的研究としては、精神の時間の客觀的測定は極めて重要なる功績と思ふのである。けれども心理學を Naturwissenschaft に對立する一種の精神科學と解するならば、精神の客觀的時間の測定は何等かの關係に於て內觀的事實に光明を與へ得るにあらずんば、かゝる研究を rein psychologische Untersuchung と容易く斷定することに、甚しく躊躇するものである。

上述の如くヴントもある場合に於ては Seele を Naturphänomen と解しながらも、純心理學的興味に動かされ居る氏にとりては、唯かくの如き精神の客觀的時間の測定のみにて其の興味を充分に滿足し得られない筈である。そこでヴントも其の結果が單に numerisch で konstant であるのみでは、遂に純心理學的興味を滿足することが出來なくなつた。而してヴントの云ふには『かくの如き測定によりて吾人は今迄知られ

なかつた一定の心的コンスタンテューを單に確定し得るのみではない、この結果から意識の本性に關するある一般的の推定を爲すことが出來る。これが自分には特に注意すべき價値である樣に思はれる。即ち此の事實に基き觀念の單一といふ一種の心理學的法則を頗る鮮に證明することが初めて出來る』

Durch die angeführten Messungen ist es nicht bloss möglich gewesen, eine bestimmte psychische Konstante festzustellen, die bisher vollkommen unbekannt war, sondern es ergeben sich aus denselben auch gewisse allgemeinere Folgerungen über die Natur des Bewusstseins, die mir sehr beachtenswerth scheinen. Es ist hierdurch erst zu vollständiger Evidenz gebracht das psychologische Gesetz der Einheit der Vorstellung.(「三」XXVIII頁)と。

ヴントがこの單なる客觀的結果のコンスタンティに滿足せず、何等かの心理學的意義を發見せんと努むる氏の思想の運行に對しては、心理學者としての氏に多大の敬意を表するものである。若し氏の云ふが如くに、この結果からEinheit der Vorstellungなるpsychologische Gesetzが證明せられ得るならば、こは慥かにNatur des Bewusstseinsに關するallgemeinere Folgerungenが可能な譯である。茲に於て初めて客觀的研究は、眞の心理學的意義を得來るのである。然し之は如何にして可能であらうか。ヴントは氏の研究(「三」)の第五章及び第六章に至つて、この點を詳論して居ると云つて居るから、(「三」XXVIII頁)余はこの方面に暫く觀察を轉じたい。

ヴントはBeiträge zur Theorie der Sinneswahrnehmungに於て感官知覺の實驗的研究を試み、其の第一章に於ては一般感覺(Gefühlssinn)殊に空間知覺(räumliche Wahrnehmungen)を主として觸覺に就きて研究し、第二章に於ては視覺の學說に關する文獻的研究を試み、プラトー、アリストテレスより中世紀の自然研究者、近世哲學に於けるデカルト、バークレー、ロック、カント及びカント學派の學說を記述詳論し、進んで第三章に至り自ら實驗的研究を企て、最初、單眼視の現象を研究して居る。

ヴントはヘルバルトの心理學の數學的組織の根本原理たるdie im Bewusstsein vorhandene Summe des Vorstellens immer gleich gross bleibe(Herbart, Psychologie als Wissenschaft sämmtl. Werke, Bd, v, S. 328)に疑問を抱き、(「三」三八一頁)若しこの根本原理がすべての經驗と一致するならば、臆說として充分の價値あるも、經驗的事實と矛盾するならば、其の臆說の效力を失ふのみならず、ヘルバルトの心理學の根柢を動搖せしむるものなりと考へ、第四章に於ては、ヘルバルトのこの學說の檢査として、意識に同時に二つの異る感官刺戟を與へて、其の印象の同時的作用の結果を兩眼視の現象に就き實驗的研究を試みて居る。そしてヴントは其の結果に基き、兩眼の視的知覺の學說を創意し『兩眼の網膜感覺は最初から互に別々に分離して生じ、然る後其の感覺は知覺過程中に一の統一的な視覺作用に融合する』(die Netzhautempfindungen beider Augen von Anfangan getrennt neben einander bestehen, und dass dieselben erst im Verlauf des Wahrnehmungsprocesses zu einem einheitlichen Sehnet verschmolzen werden.)のであらうとの假定を作り、(「三」三九六—二九八頁)之れが直接の證明を第五章に試みて居る。

第五章に於ては兩眼視の特有現象たる光輝(Glanz)對照(Contrast)知覺鬪爭(Wettstreit

der Wahrnehmungen) を研究して Gesetz der Einheit der Vorstellung の問題に直接に突入して居る。即ち兩眼視につきて、對照及び知覺闘爭の現象を研究して見ると、二つの刺戟の物理的强度は精密に同一であるにも係らず、一方の印象は他の印象を排除して自己の印象のみを意識に上昇せしむる所謂ヴントの Verdängungserscheinungen (下三巻二三四頁) がある。ヴントはこの現象を以てある物理的因素からは到底説明が出來ないものとし、意識の本性に歸着せしむべき心的一般法則より説明せらるべき特殊の場合と考ふるに至つた。茲に云ふ心的一般法則 (allgemeine psychische Gesetz) とは一の觀念に相互に合同することの出來ない二つの印象が意識に働く時は、一定の時間内にありては其の印象の一方のみが知覺せらるゝ許りである (wenn zwei Eindrücke, die sich nicht in eine Vorstellung vereinigen lassen, auf das Bewusstsein einwirken nur der eine derselben in der Zeiteinheit zur Auffassung gelangt.) (下三巻三三五頁) と云ふ義である。之をヴントは Gesetz der Einheit der Vorstellung と名けて居るのである。そしてヴントはこの法則が無ければ Verdrängungserscheinungen は全然 unverständlich であるであらうから、此の Verdrängungserscheinungen は、この法則の有力なる證明の手段となるのである。即ちこの Verdrängungserscheinungen はこの法則の特殊の場合を示すものであるといつて居る。(下三巻三三五頁)。かくの如

くしてヴントは實驗的研究の結果から意識の本性に關する一般的推論(allgemeinere Folgerungen ueber die Natur des Bewusstseins)を爲さんとして居るのであるが、此の推論の過程が本稿の重要點であるから、更に深くヴントのこの一般的推論の筋道を考察する必要がある。

ヴントは第五章の終に於て次の如くに推論して居る。

本章に於て研究したる一切の事實から、二個の推論を爲すことが出來る。即ち其の一は兩眼視の法則(die Gesetze des binokularen Sehens)であつて、他は觀念作用の一般法則(die allgemeinen Gesetze der Vorstellungsthätigkeit)である。前者に依れば、兩眼視は兩眼の印象の單なる總和(ein reines Summiren der Eindrücke beider Augen)と見做すべきものではない。又共通の視野(das gemeinsame Sehfeld)は、互に一致する網膜の興奮の直接の混合によつて結合せられるのでもない。各の眼は獨立して別々に各個の知覺を爲し、兩眼の知覺は別々に精神に働くのである。かくして漸く後に、精神的結合の援助の下に兩眼の知覺から兩眼の完全なる視的知覺が成立するのである。(auf dem Wege psychischer Combination entstehlt aus ihnen die vollendeterebinokulare Gesichtswaehrnhmung)(下三巻三十三頁)

先にヴントは個々の眼の知覺も、無意識的な心的過程の系列(Reihe psychischer Proce-

sse unbewusster Art)の下に成立すると考へたのであるが、之と同樣に今又兩眼知覺の成立も無意識的な判斷作用(ein unbewusstes Schlussverfahren)に外ならないと考へ、個々の知覺は、空間的の廣がり及び之と關係せる外物の物理的構造に關する判斷を導くために、唯單に利用せらるのみである。個々の知覺其者は一般の知覺に合一せしめる力は無いけれども、相互的の影響(gegenseitige Einfluss)を示すことは、無數の對照の現象から知ることが出來る。そしてこの影響を physische Antagonismus に歸することは出來ない。寧ろ判斷の規定(Bestimmung des Urtheils)に屬せしむべきものである、(「三」三七四頁)と考へた。

ヴントはかくの如くに論じて、兩眼視の深さの知覺の現象に於て推定した斷定(die Wahrnehmung jedes Auges einzeln zur Auffasung kommt, dass aber im gemeinsamen Sehen durcheinen psychischen Process beide Wahrnehmungen zu einem Ganzen verschmelzen)を全く異る研究方法によりて直接に證明したのである、(「三」三七四頁)

第二の推論は兩眼視の法則と密接な關係はあるけれども、視的知覺の領域以外にまで關係を及ぼすものである。即ち我々は同時に一個の視覺觀念より多くの觀念を作ることは絕對に出來ない。對照及び實體鏡的結合に於て現はるゝ判斷作用(di-

e Urtheilsprocesse) は、異なる知覺の同時的結合無くしては考へることが出來ないが、然しこの判斷作用はすべて無意識態 (Unbewusstheit) に起り、意識に現るゝのものは唯この判斷作用の結果 (das Resultat dieser Processe) のみである。而してこの結果は常に單一な觀念 (eine einheitliche Vorstellung) である。吾人は兩眼の知覺を別々に並立して意識に把捉することは出來ない。意識に現るゝ時は常に統一的な全體(einheitliches Ganze)である。そしてこれは如何にして結合せられたのか、吾人は之につきては少しの知識も有し得ない。此の場合に如何なる過程が生起したかは、科學的研究によりて推定するの外はない、(「三」三七四頁)のである。

この無意識的精神過程は、互に無關係なる感覺から知覺を構成するのみならず、更に直接にして且つ簡單なる知覺其の者を結合して複合的知覺を作り、尙進んで精神的產物に系統と組織とを與へる、(die aus den beziehungslosen Empfindungen Wahrnehmungen heranbilden, sondern die auch die unmittelbareren und einfacheren Wahrnehmungen selber wieder zu zusammengesetzteren verknüpfen und so Ordung und System in das Besitzthum unserer Seele hineinbringen.) (「三」三七五頁)のである。

ヴントはかくの如くに、論定して、ヘルバルトの異る二個以上の觀念の同時存在の

臆說を破り、同時に意識に二個以上の觀念の共存を否定しEinheit der Vorstellungの法則を明にした。そして之は意識の本來の性質に基くものとし全精神生活の特色を前記の事實から次の如くに推定した。

Unser gesammtes seelenleben stellt sice dar als die Continuirliche Aneinandereihung logischer Processe. Durch diese bauen wir aus dem Empfindungen Wahrnehmungen auf und schreiten von den Wahrnehmungen zu Vorstellungen; die Folge dieses Continuirlichen Verlaufs der logischen Processe unserer Seele ist die Zeitreihe, unter deren Form wir alles psychische Geschehen auffassen. Schon Kant hat die Zeit mit einer mathematischen Linie verglichen. Dieser Vergleish sagt nichts anders, als dass wir nicht verschiedene Zeitreihen gleichzeitig anschauen können, dass wir nicht logische Processe verschiedener Art gleichzeitig vollziehen können. (「三」385頁)。

ヴントのこの『全精神生活の一般的特徴たる、論理的發展』はヴントの所謂 das Gesetz der logischen Entwickelung der Seele (「三」XXXI頁) と呼ばるゝものである。

ヴントは最初天文學者の發見したる問題中に、感官知覺成立の心理學的問題を摘み、之を研究するに主として觀察と實驗とを重じて事實の基礎の上に臆說を考案し、從來の缺陷たる dass entweder das experimentelle Material für die Theorie nicht hinreichend verw-

er hat ist, oder dass die theoretischen Spekulation ohne experimentelle Stütze hingestellt sind. (三XXXI頁)を免れ das Gesetz der Einheit der Vorstellung を視覺の內觀的事實に於て、具體的に確定し、更にこの法則を擴張して das Gesetz der logischen Entwickelung der Seele にまで押し進めた。

ヴントのこの das Gesetz der Einheit der Vorstellung 及び das Gesetz der logischen Entwickelung der Seele の確定は、前にヴントの云つた樣に八分の一秒なる客觀的時間から直接に推定せられたのではない。ヴントは最初(XXVIII頁)に於て、このコンスタントから意識の本性に關する allgemeinere Folgerungen が出來る。此點が客觀的結果の Sehr beachtenswerth の存する所であると云ひながら、實際に於て一般的推論の基礎となつて居るものは、上に詳說した如く兩眼視の現象を實驗的に生起し變化せしめて之を內觀したる自己觀察の事實である。而して何等の客觀的又は數量的結果の上に推論せられたものではない。唯普通の內觀の如くに自然に生起した現象を觀察したのでなく、客觀的事物の補助を利用し實驗的條件の下に內觀したのである。從つて吾人はヴントのこの感官知覺の研究によりて、未だかつて吾人の知らなかつた多くの內觀的事實を知るを得るに至り、茲に心理學は內觀的事實の新なる發見を起して、

科學研究の一大目的たる心理學的經驗界を擴張した。加之之に基きて意識の一般性をも推定し得るに至り、心理學は一種の心的法則を有するに至つたのである。

余はヴントのこの感官知覺の研究は、其の手段に於て、其の方法に於て、眞の意味に於ける實驗心理學的研究の一活範であると思ふ。そしてヴントがこの Beiträge z. Theorie d. Sinneswahrnehmung に於て、已に實驗心理學の科學的方法を確立して居ると云ふのも、視覺の研究に於て採用したるこの『實驗的條件內に於ける精密なる內觀』を指示して居るのであると解したいのである。

Das Gesetz der Einheit der Vorstellung の推定に、八分の一秒なるコンスタントが利用せられて居るのは、間接的、暗示的な點にある。卽ち吾人が視聽の兩觀念を同時に意識するに要する時間を測定すると、八分の一秒なる恒常の誤差がある。これが時間的測定に於て客觀的に直接に知り得られた事實である。この事實を心理現象と關係せしめんとせば、被驗者の內觀的事實と結合せしめねばなるまい。卽ち客觀的事實と內觀的事實の聯合、從つて二つの異る觀察の見地の結合に於てのみ八分の一秒は心理的現象と交涉を生じて來る。この二つの異る見地の聯合を許した上で、初めて das Gesetz der Einheit der Vorstellung の推定が可能となるのである。けれども其の推

定は猶暗示的、間接的に止り、到底直接推定の基礎となることは出來ない。この點に於て客觀的時間は統計的研究の結果と同列に位するのである。眞に[Einheit der Vorstellung を明ならしめんと欲せば、ヴントの爲したる如くに、實驗的條件内に於て觀念其の者の生起、共存、變化、消滅の有樣を直接に内觀するの外は無い樣である。

ヴントも又 Einheit der Vorstellung がこの八分の一秒から直接に推定が出來るとは思つては居ないのである。直接の推定が出來ないから氏は特に視覺の研究を詳細に試み、而して以て眞の心理學的事實の基礎を與へんとしたことは、次の文章を見れば明である。

Ohne dieses Gesetz der Einheit der Vorstellung, das früher schon häufig ohne nähere Begründung behauptet, zuerst aber von den Astronomen bei dem Versuch der gleichzeitigen Auffassung von Schall- und Lichteindrücken experimentelle erwiesen wurde, würden diese Verdrängserscheinungen vollkommen unverständlich sein, sie geben daher selbst ein starkes Beweismittel für jenes Gesetz ab. (「川」335頁)

故に余は、ヴントが XXVIII頁に於て數量的常恒の價より意識の本性の allgemeinere Folgerungen の出來ると云つて居るのは、間接的、暗示的なる Folgerungen を意味するものと解するを以て、ヴントの眞意に接近するものと思考するのである。尙進んで氏

の意を酌みて云ふならばこの allgemenere Folgerungen は實驗的條件内に於ける内觀的事實にのみ施して、初めて意識の本性を明に爲し得ると考へて居つたのであらう。ヴントは Einheit der Vorstellung の法則を第五章六章に於て詳論して居ると云つて居るが、併し前に詳說した如くに、五章六章に使用せられ居る論材は殆んど全く視覺現象の内觀的實事であるのみならず、合計四百五十一頁の大論文中客觀的方法によりて精神の客觀的時間を測定し、この基礎の上に意識の本性を明にせんとしたる努力は、ほんの少ししか現はれて居ない。殆んど無いと云つてもよい位である。若しヴントが誤つてかゝる方向に走つたならは、後年のドンデルス又はエックスネルの研究と同一の所に達し從つて眞の心理學的研究に進み得なかつたであらうが、適者心理學者としてのヴントの最初の進路は、正路に向つて居る。

又ヴントは已に其の初期に於て心理學的實驗の核心を客觀的特徵の測定に求めずして、實驗的條件内に於ける内觀に認めて居る。Die Sinnesreize sind um es kurz ausdrücken, für uns nichts anderes als experimentelle Hülfsmittel, Indem wir die sinnesreize mannichfach verändern und dabei fortwährend die psychischen Erscheinungen studiren, bringen wir nur das Princip zur Anwendung, in welchem das Wesen der experimentellen Methode besteht, wir verändern um

mit Baco zu reden die Umstände unter welchen die Erscheinungen aufteten. (「II」XXIX—XXX頁)の
を見ても、ヴントが、客觀的結果から意識の性質を推定しなかつた理由を略ぼ了解し
得ると思ふ。

又天文學者が彼等の研究の客觀的結果から das Gesetz der Einheit der Vorstellung を推
定したと云はれて居るも、これは客觀的結果から直接に推定せられたものではある
まい。客觀的結果に個人差の存することより暗示せられて知らず〳〵の内に比較
的精密なる内觀を試み、この基礎の上に Einheit der Vorstellung の法則を考案し得るに
至つたのであらう。從つて推論に用ひられた直接の材料は、客觀的結果にあらずし
て内觀的事實であらねばならぬ。故に若し天文學者が動物若しくば子供の如くに、
自己の心的現象を内觀するの能力が無かつたならば、兩觀念の同時知覺の時間の個
人差を測定したとするも、das Gesetz der Einheit der Vorstellung を推定するには至らな
かつたであらう。而して實際又この研究の初期の學者は、觀察の個人差は發見して
も、其の精神的意義は少しも考察しなかつたのである。

余は最初ヴントが客觀的結果から意識の本性に關する allgemeinere Folgerungen が
出來るといふ主張に對して非常なる興味を感じ、然らば如何にしてそは可能なるか

の過程をヴントの論文につきて詳細に研究し、その結果は寧ろ反對の結末に達した。而してヴントの表面的主張も破られ、精神の客觀的時間の測定は、個人心理學に對しては單に暗示的意義を有するに過ぎないものとなり、眞の心理學的意義を認め得るの境に達せなかつた。こは誠に遺憾な事ではあるが又當然のことなのであらう。

かくの如くヴントは氏の Beiträge の始めに於て精神の客觀的時間の測定の結果より意識の本性の推定が出來る。これが客觀的研究の psychologisch に sehr beachtenswerth であり、之によつて、客觀的研究が rein psychologische Untersuchung となり得るのであると論定しながら、眞の推定は實驗的條件内に於ける精密なる内觀の事實の上に試みられて居る。從つて客觀的結果の心理學的意義はこの Beiträge に於ては充分に認むることが、出來ないのみならず、ヴント自身もこの論文に於ては、精神の時間的測定は唯、先の八分の一秒を算出したのみである。けれどもヴントの他の論文又は著書に於ては、かゝる方面の研究の必要を高潮し、又力を極めて後學者に其の研究を熱心に慫慂して居る。然らばヴントは此等の論文に於ては、如何なる興味、如何なる動機に基いて精神の時間測定を奬勵したのであらうか。精神の時間測定のヴントの他の動機を了解せんがため、余は暫くヴントの他の著述につきて考察したい。

參考書

I′ Wundt, W. Die Messung psychischer Vorgänge. Essay. 1885.

II′ Exner, Experimentelle Untersuchungen der einfachsten psychischen Processe. Archiv für die Gesammte Physiologie des Menschen and der Thiere. 1873.

III′ Wundt, W. Beiträge zur Theorie der Sinneswahrnehmung. 1862.